

転職エージェントによる誌上ガイダンス

キャリアプランは 雇用の本質を理解してから

雇用環境や採用状況については日々ニュースが飛び交い、さまざまな言説もあるため混乱している人も多いでしょう。転職エージェントの経験が長く、リクルート『Works』編集長を経て、人事コンサルティングなどとしても活躍する海老原嗣生氏が雇用問題で知っておくべきこと、キャリアプランニングで気をつけるべきことをレクチャーします。

取材文／荒尾貴正(本誌編集デスク)



海老原嗣生氏
えびらはつぐお●1964年生まれ。大手メーカーを経て、リクルート人材センター(現リクルートエージェント)入社。新規事業企画などを経て、リクルート『Works』編集長に。2008年に人材コンサルティング会社、ニッチモを立ち上げ、代表取締役役に就任。リクルートエージェント社ソーシャルエグゼクティブも兼任。週刊モーニング(講談社)に連載され、ドラマ化もされた漫画『エンゼルバンク』の“カリスマ転職代理人、海老沢康生”のモデル。『「若者はかわいそう」論のウソ』(扶桑社新書)、『2社で迷ったらぜひ、5社落ちたら絶対読むべき就活本』(プレジデント社)など著書多数。

「若者はかわいそう」
というウソ

大学を出たのに就職できない人が増えている。それは企業が採用数を減らしているため。利益のために総合職を減らし、代わりに非正規社員やアルバイトを増やしている。だから多くの若者が非正規社員にしかたない

こういった認識をもっている人が多いようですが、データを正しく見ていくことで、実はこれらは根拠のないことだとわかります。社会の構造をできるだけ正しく、客観的にとらえ、そのうえでキャリアや将来の仕事、進学先を考えていくことが重要なのはいうまでもありません。

非正規社員の7割以上が 主婦、年配者、学生

まず、「正社員を減らし、代わりに非正規社員を増やしている」という点について検証しましょう。

現在、非正規社員は約1722万人(図1)。労働力調査(総務省)で内訳を見ていくと、次のようなことがわかります。「一番多いのは主婦で900万人。次いで定年退職後に非正規で雇われた60歳以上の男性257万人。さらに学生150万人。ここまでで計1307万人。つまり非正規社員の75%以上は、もともと正社員になる可能性の低い主婦、年配者、学生が占めていることを知ってください。

残りの約415万人のうち、日雇い労働者が約110万人。これは年々減

少しています。これ以外は以前と形態のみ変わったものが多く、たとえば、かつて女性一般職が数多くいましたが、差別的な待遇が問題視されてすっかり派遣社員に切り替わり、また製造業で問題のあった請負から派遣へと変更した人々などもここに含まれます。

このように探っていくと、「正社員を削り、非正規を増やしている」という実態はほとんど見えてきません。「非正規」かわいそうな若者」といったイメージをもっていた方がいると思います。それは誤りであるとわかっていただけたでしょうか。

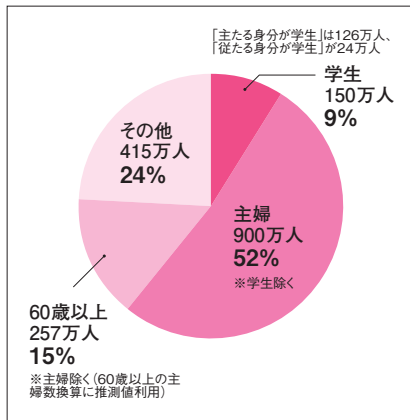
本当に手を打つべきは 女性と高卒者

図2は非正規率を男女別に見たも

のです。男性は20〜24歳が36%。そこから年をとるにしたがって下がっていきます。女性は20〜24歳で43%と男性よりいくぶん高いですが、20代後半で微減したあと、30代以降、どんどん率を上げていく。男女の差がますます大きくなっていくことがわかるでしょう。

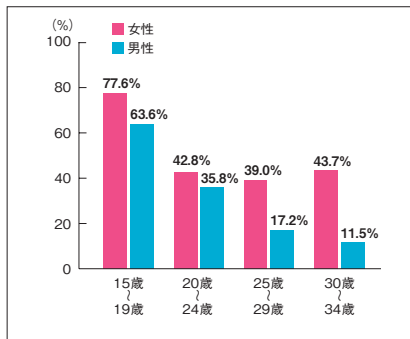
女性を未婚、既婚で分けると、未婚者の非正規率が2割台なのに対し、結婚すると約6割に上昇(図3)。つまりこの国では、家事労働の多くを女性が担っており、女性は正社員などとてもやっつけられないといった現状が見えま

図1 非正規雇用1722万人の内訳



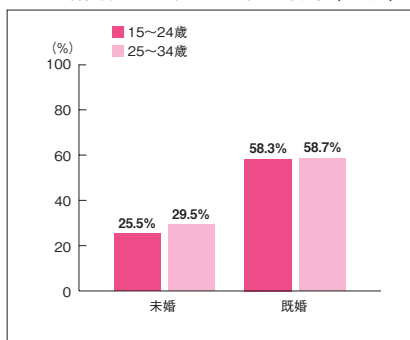
「労働力調査」(総務省)より

図2 男女×年代別の非正規雇用者率



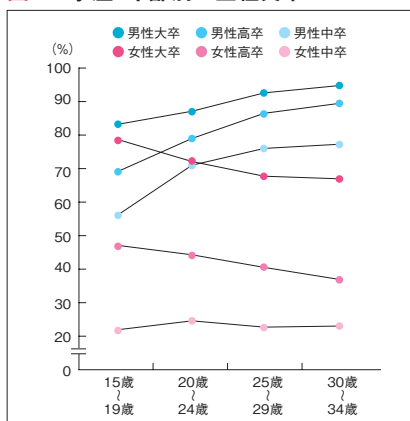
「労働力調査」(総務省)より

図3 婚姻による非正規雇用者率(女性)



「労働力調査」(総務省)より

図4 学歴・年齢別の正社員率



「就業構造基本統計調査2007」(厚生労働省)より

す。それを理由に結婚や育児を避ける女性も多いのです。ちなみにアメリカにおける1週間の家事労働時間は、男性19時間、女性28時間。日本は男性が6時間ですが、これはアメリカでワーキングママが始まった40年前と同水準。また女性管理職の比率は日本の10%に対してアメリカは43%。日本がいかに遅れているかがわかるでしょう。

図4は正社員率を学歴別に見ていきます。男女とも学歴が上であるほど、正社員率が高いことがわかります。図2~4から、日本の機会均等について、2つの歪みが見えます。ひとつはジェンダー、もうひとつは学歴。国は本来、ここにこそ手を打つべきです。「若者かわいそう」「高卒かわいそう」という意味なら私もまったく同意見です。しかし、「大卒かわいそう」は違うのではないのでしょうか。

大卒採用の実態

リーマンショック以降、また「就職氷河期」という言葉が使われ始め、大学新卒者の就職口が減っていると思われている人がいるかもしれませんが、それは違います。

次ページの図5のように、大学新卒で正社員就職する人の数は、80年代後半のバブル期よりも就職氷河期の現在のほうが2割程度増えています。大手企業の採用総数も、景気による上下動はあるものの大きなトレンドとして減っていません(図6)。国内マーケットは縮小しつつありますが、海外需要は伸びています。だから企業が大卒求人者を減らす理由はないのです。

は大学生が増えているから。ここ25年間で大学生数は7割増、学生数は6割増。この大学生たちがこぞって大手企業にアプローチすれば、学生が超過剰な状態となるのは当たり前です。では現実には、企業の採用人数と大学卒業生数とはどんなバランスになっているのでしょうか。

人気企業枠2万人に対し 大学生5万人という現実

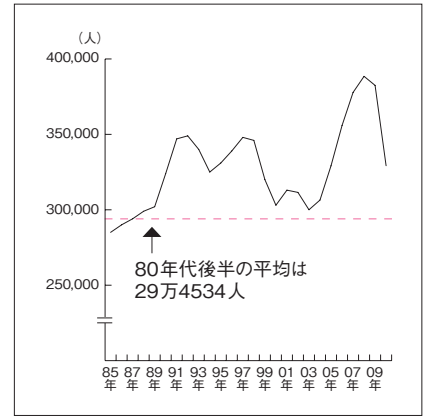
人気企業ランキング200社の採用人数を足し上げると、不景気のとき1万数千、好景気で3万人、平均して2万人程度です。一方、大学について、試みに東大、京大などの旧帝大や早大、慶大、二橋大、東工大、東京外国語大など、いわゆる超有名大学だけを足しても毎年5万人弱の卒業生がいます。こ

こまで「2万人対5万人」というひとつの構図が見えます。

次に企業を主要1000社に広げてみます。ここには各業界トップ5の企業が入りますが、採用総数は5~10万人。一方、大学ももう少し広げ、一般に「憧れの大学」と見られているような大学を先ほどの数に加えると大よそ13万人。ここに「5~10万人対13万人」という構図が見えます。

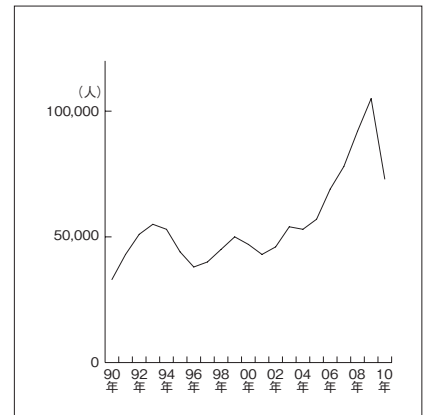
この「2万人対5万人」や「5~10万人対13万人」という数字を押しさえておくこと、つまり相場観を知っておくことは重要です。ここから言えるのは何か？ 大学卒業生は毎年55万人ほどいますから、上記に属さなかった40万人が主要1000社といった大手企業に入ることは、可能かもしれないが簡単ではない。そう考えるのが妥当ではないのでしょうか。

図5 大学新卒者就職者数



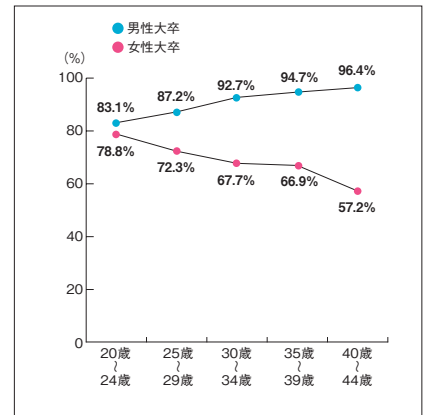
〔学校基本調査〕(文部科学省)

図6 主要企業の大学新卒者採用予定数



日経リサーチ調査より推定

図7 大学新卒者の正社員率



〔就業構造基本統計調査2007〕(厚生労働省)より

図8 就職に際してのアドバイス

- 1 企業選びは、選り好みしすぎないこと。
貴重な20代前半を無為に過ごすのは極力避ける
- 2 フリーター、アルバイトになったとしても
真面目に働く
- 3 てきたら学生時代に中堅中小企業で
インターンシップ、アルバイトなど体験しておく

大卒から10年間で
中小の正社員におさまる

大学卒業者のうち、毎年8〜10万人がフリーターや無業となつていきます。その人たちがその後どうなっていくのかが図7から読み取れます。

これは大学新卒者の正社員率を示している、男性の20代前半は83%。ここから徐々に正社員率が上がり、30代後半には95%。つまり男性に限っていえば、大学卒業後に10年間で中堅・中小企業に腰を落ち着けていくのです。それは卒業時に無業だった人に限った話ではありません。実は日本は「終身雇用社会」ではなく、1〜2回転職して定着していく人の多い「準終身雇用社会」です。これがこの国のキャリア形成の基本的なスタイルだと私は見ています。

ならば大学生は最初から高望みなどせず、中堅中小企業に進めばいいという人がいるでしょう。求人もいくらでもあります。中堅中小には端から大卒採用をあきらめていて、求人票すら出さないのに、どこから手が出るほど欲しい、という企業もあります。

けれども、学生がそういう企業を選ばないという現状があります。ひとつには、ホワイトカラーの仕事は外から見てもわかりづらく、やってみなきゃ入ってみなきゃわからないという点が非常に多いこと。また、名も知らぬ企業なのかから自分が行くべき企業を選び出すのはとても困難だということ。今の学生は「安定志向」「ブランド志向」といわれますが、それは昔も変わりません。要は中堅中小には選ぶ決め手がなから、どうしても知名度のある企業に応募が集中してしまうのです。

つまり、若者と中堅中小企業とのマッチングはとても難しい。だから、軟着陸に10年かかると考えるのが自然です。何度か転職をしたり、アルバイトなどで真面目に働いているとある日、社長に「君、うちの会社にどうだ？」と誘われる。そうして採用されるまでに10年。それが真相だと思います。だとすると、この10年をいかに短くできるかが、キャリア教育でやるべきことのひとつでしょう。

例えば企業選びについて、次のようなアドバイスができます(図8)。ひとつは、あまり選り好みしないほうがいいということ。そしてフリーターをやるにしても、そこで真面目に働くこと。さらに学生時代に、できたら中堅中小企業の実態に触れる機会をもつこと。インターンシップなどで行っておくのもいいと思います。

「営業職7割」の社会で
生きる道

会社のなかの職種についても相場観をもっておきましょう。大学を出るとどんな仕事につけるのか。誤解されることが多い文科系について、私の知識・経験をもとに見取り図を描くと図9のようになります。

文科系の大学・学部を出た人のおよそ70%は営業職になります。メーカーであれば理科系が商品をつくり、文科系が売る。これが一般的です。日本の会社の7割はサービス業ですから、それを考慮しても企業では多くの営業職が必要とされることがわかってきます。

20%は経理部や法務部、人事部、総務部といった会社の事務・管理部門で



働きます。さらに5%はSE(システムエンジニア)。SEは理科系出身者のほうが多いですが、文科系出身者も珍しくありません。ICT企業や一般企業の情報システム部などに在籍します。

以上で95%。つまり文科系の大学を出たほとんどの人は、営業職か事務・管理部門かSEのどれかに就くことになります。

残り5%には、実にさまざまな職種が含まれます。アナウンサー、デザイナー、編集者、カウンセラー、広告プランナー、通訳者、ツアーコンダクター、キャビンアテンダントなどなど、この5%のなかに1000職種ほど仕事があるといわれています。

ぜひ知ってほしいのは、こうした現実です。若者がこの5%を目指して頑張ることを私は否定しません。けれども、煽ることもしたくありません。キャリアカウンセラーや学校の先生方は、こうした職種の取り扱いには慎重になるべきだと思います。

以上のような相場観を得たところで、学生時代に何をすべきか考えましょう。私から提案できるのは次のようなことです(図10)。

**対人折衝能力がムリなら
資格取得もアリ**

ひとつは、やはりコミュニケーション能力、対人折衝能力は磨いたほうがいいということ。図7で、30代後半で非正規の人が5%いました。このなかには対人折衝や人間関係について問題を抱える人が少なからずいるでしょう。そういう人たちにとっては、本当に気の毒な時代になったという以外にありません。若い人にはできるならば、その力を高める努力をしていただきたい。

けれども、どうしても難しい人もいます。そんな人には事務・管理部門かSEに近づくための資格取得をすすめます。簿記や税理士、公認会計士、弁護士、情報処理技術者などです。資格さえ取れば安泰などとは間違っても思わないでください。これらの資格をとつても低収入に甘んじている人はたくさんいますし、結局は対人折衝能力がものをいう点と同じです。ただ、営業職につきたくない場合、資格をもつていればその望みがかなう可能性が高まりますし、「まったく食べない」ことはないでしょう。

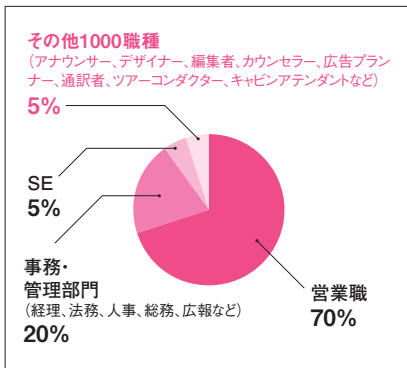
**6つの力のうち
2つあれば生きていける**

もう少し根本のところから鍛える気持ちのある人には、企業が求めるベシク能力についてお教えしましょう。『自律的に物事を考え、行動できる人』『問題発見ができ、解決もできる人』。『そういう人を企業は求めていると最近よく聞きます。確かにそういう新入社員を求める企業はありますが、全体的に見ればそれほど多くありません。』

一方で、多くの企業が採用場面で、本音のところで注目するポイントがあります。「高偏差値の大学出身か」と「運動出身か」。なぜこの2つを見るのか、理由はこうです。

まず優秀な大学を出た人については、次の3つのうち少なくとも1つは該当するはずだと見ています。

図9 大学を出て就く職業(文科系の場合)



- ・ 地頭がいい
- ・ 要領がいい
- ・ 継続学習ができる

また運動部出身者については、次の3つのうち、やはり1つはあるだろうと見えています。

- ・ 体力がある
- ・ 精神的なストレスに強い
- ・ 集団に強い

(人を嫌われない、人に嫌われない) これら6つの力のうち、少なくとも2つ以上をもっている人ならば企業は雇ってくれるし、企業のなかで生きていくこともできるでしょう。

これらのポイントを自分と照らし合わせてみて、もし弱い部分があったらそれを鍛える行動をしてみる。そうした経験をきちんと面接で話せるような人には、企業もきつと興味をもつてくれます。

図10 就職に備えて、
学生時代にしておくこと

- 1 コミュニケーション能力、対人折衝力を磨いておく
- 2 上が難しければ、資格取得も検討したい
- 3 企業が求める以下の力のうち、2つぐらいもてるように努力する
 - ・ 地頭がいい、要領がいい、継続学習ができる、体力がある、精神的なストレスに強い、集団に強い(人を嫌われない、人に嫌われない)